



Title	カミュ晩年における文学創造の軌跡 ー追放から再生へー
Author(s)	安藤, 麻貴
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/76330">https://hdl.handle.net/11094/76330</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名 ( 安藤 麻貴 )

## 論文題名

カミュ晩年における文学創造の軌跡—追放から再生へ—

## 論文内容の要旨

本論文は、カミュ（1913-1960）が公私共に試練の時だったとされる1950年代に出版、もしくは執筆した文学作品である『転落』（1956年）、『追放と王国』（1957年）、『最初の人間』（死後出版）、及び翻訳、写真集、映画の解説等の植物をめぐる著作を分析することによって、作家の作品体系における「審判と追放のテーマ」から「愛」の系列への移行を明らかにすることを目的としている。

第Ⅰ部は、「審判と追放のテーマ」に分類される短編集『追放と王国』を構成する六つの物語における「追放」の表象を分析した。これらの物語は、主人公も舞台もそれぞれ異なり、多様性に富んでいるが、カミュ本人によって、この短編集における「唯一のテーマ」は「追放」であると明記されている。したがって、本稿では、このテーマが各々の短編でどのような独自性を持って深められているのかを、これまで先行研究ではほとんど例がない生成過程の観点から、主に考察した。以下、短編が並べられた順序に従って、考察の要点のみを記す。

第1章「「不貞の女」—く異邦の女>の孤独と追放—」は、夫との生活でヒロインが抱く孤独が、夫婦で訪れたアルジェリア南部の旅先で生成過程を通して深められていく過程を、現地のフランス人、アラブ人双方との関係において明らかにした。

第2章「「背教者」—隷属と所有（舞台タガザの源泉をめぐる考察）—」では、これまで謎とされてきた物語の舞台の源泉を、イブン・バットゥータの旅記であることを突きとめ、カミュがそこから着想を得た理由として、中世アフリカにおける奴隷制度と、全体主義の圧政のもとにあるヨーロッパの「強制収容所の世界」との照応を指摘した。さらに物語の場に、冷戦構造にあった当時の黙示録的ヴィジョンも見出されることも指摘した。

第3章「「口をつぐむ人々」—若さの喪失と労働者の悲哀—」は、同じ頃に着想された『最初の人間』でも描かれる作家の叔父が働いていた樽工場という特殊な場を舞台としているが、この短編独自の追放の表象として、海の喪失に表される青春時代からの追放と、言葉と権力を奪われた労働者の状況に焦点を当てて分析した。

第4章「「客」—二つの共同体の狭間で—」では、アルジェリアの独立運動を背景に、主人公が故郷の「王国」にあって「追放」状態に陥る過程を、アラブ人との関係のみならず、理論上は「同胞」のフランス人憲兵との関係にも着目しつつ、タイプ原稿を詳細に辿ることによって明らかにした。

第5章「「ヨナ」—孤独か連帯か—」では、この物語の前身とも言える『手帖』の断章、黙劇からこの短編へ、他者との連帯を図る芸術家像が深められ、この傾向は、短編自体の生成過程において、特に妻、家族との絆を強める方向で認められること、それに伴い、結末のヨナの再生の可能性を示唆する修正がなされていることを示した。

第6章「「生い出ずる石」—他者との連帯の実現—」では、カミュが自身の南米での滞在日誌をもとに、それをいかに修正して、人種、宗教、文化、言語、身分の相違を乗り越え、現地の貧しい界限に根付くであろうく最初の人間（白人）>として描いているかをタイプ原稿を詳細に辿ることにより実証した。頭に巨石を乗せて運ぶダラストは、これに先立つ5つの短編の主人公たちのく追放>状態を一手に引き受けるキリストを想わせ、また、カミュ自身が生涯で最も気の滅入る旅行からあえて創造した再生のく英雄>でもある。実際彼は、当時読んでいた『神曲』の地獄篇と天国篇の関係のように、彼自身と同時代人の直面する「追放」の表象を描いたのち、「愛」の系列の『最初の人間』の執筆に着手する。

第Ⅱ部「植物をめぐる著作と再生」は、短編集の構想及び執筆時期と重なる1952年から54年にかけて書かれた植物をめぐる著作を分析することによって、やはり同時期に構想が練られていた『最初の人間』創作への行程を明らかにしようとする試みである。

第1章では、まず、これまで研究者の注意を引いてこなかった、カミュが1952年に翻訳、出版しているアメリカの作家ジェイムズ・サーバーの絵本『最後の花』を取りあげた。この絵本は、戦争による破壊と再生の反復のなか、やがて決定的な破壊が起こり、もはや一組の男女と一輪の花しか残らなかったという物語である。この結末は、翌年に着

想されたとされ、カミュが表題の候補として「アダム」も考えていた『最初の人間』へと連なる。

次に、翻訳と同年にカミュがルネ・シャルと手がけた写真集『太陽の後裔』（死後出版）における南仏の自然をめぐる言説をタイプ原稿を参照しつつ分析した。カミュはこの作品の中で、植物の秘める生命力に目を向けており、シャルにより死後修正された断章の中に、カミュが死から生へ、冬から春へとといった、再生の過程を描いているものがあることも指摘した。また、小説の着想よりも前に、樹木の映像から「最初の人間」「最初の庭」という表現を導き出していることは、特筆に値する。

1954年公開のディズニー初の長編ドキュメンタリー映画『砂漠は生きている』の解説本収録の「雨と開花」においてカミュは、灼熱の砂漠に、突然の雨によって色とりどりの花が「エデン」のように出現する様子に驚嘆する。その生命の束の間の輝きと儂さは、『最初の人間』に描かれる、過去のない土地で生成を繰り返す入植者の姿と重なる。

この時期カミュが植物の生成に関心を寄せていたことは、14年前に執筆したエッセー「アーモンドの木」をあえて1954年刊行の『夏』に再録していることから窺える。こうした、1950年代前半のカミュの植物の生成に向ける目は、朝鮮戦争、核開発といった不穏な世界情勢のもとに培われたものであり、歴史によって破壊される美に対する鋭敏な意識を表すものである。

続く第2章では、母国アルジェリアの独立戦争中、カミュがいかに『最初の人間』において、自らの幼年時代という楽園を描いているのかを、草稿を調査して考察した。その生成過程には、カミュが記憶を辿りながら、植物の具体的な名前を記そうと努力した跡が見える。そこには、廃墟と化す恐れのある祖国、その歴史の流れに抗い、「幸福、エネルギー、創造の大地」を彼の筆のもとに蘇らせようとする、アルジェリアの再生への希望がある。

第Ⅲ部「水と再生」では、『転落』における北の冷たい運河の街から、『最初の人間』における幼年時代の光り輝く「誕生と洗礼」の海へ、作者自身の〈失われた海〉の探索と軌を一にするその行程を、水の表象の分析を通して考察した。第1章「『転落』—罪と水—」では、偽洗礼者ヨハネを演じる主人公において、罪が川というトポス、アムステルダムのだんての地獄を想わせる同心円の運河、カミュがその生成過程において、あえて「地獄」を加筆したマルケン島等、風景描写と密接に結び付いていることを示した。この空間は、カミュにとって追放と結び付く中欧やパリとも混然一体となって、「南」と対立する「北」の表象として描かれている。その対立を明らかにするように、カミュは生成過程の途中で実際に訪れたギリシャの印象を投影し、光と闇の対照を明確にしている。『転落』の主人公は、川に身投げをした女性を救うには「遅すぎる」という認識のもと、永久に罪の意識から逃れられない。一方で、『最初の人間』の主人公は、自身より若くして戦死した父親の墓石の前に、「大河」のような時間秩序が崩壊し、「粉碎、砕け波、渦巻き」となった瞬間、父の記憶を再構築する旅に出ることを決意する。「この新たな時間の秩序」が遺作の出発点となる。

続く第2章では、追放の表象としての水から幸福な水への転換として、短編集の最後に置かれた「生い出ずる石」が重要な意味を持つ作品であることを指摘した。カミュははじめ、主人公が原住民から受け継いだ石を船に載せ、川を遡って消え去るという結末を考えていたが、決定稿にあるように、石を貧しい小屋に運び入れるという結末に変えた。文字通りの意味での源泉に遡るという描写ではなく、作家は、より象徴的に、物語の最後に泉のように広がる貧者との連帯の輪を配したのである。そこに根付くであろう主人公と、「泉の園」にある、表題の生える「石」との間には、照応が見られ、また、カミュが自らの「根」である貧しい家族へと回帰する『最初の人間』の世界へとつながる。

第3章は「『最初の人間』—島々への帰還—」と題し、主人公がオデュッセウスさながらに帰還するアルジェリア、貧しい界限、母親という〈島々〉が、全て匿名と忘却を余儀なくされており、カミュはそれに抗するように、失われつつある彼の祖国を〈現在進行形〉で書き留め、幼少期という「王国」を蘇らせ、家族の記憶を再生させようと試みていることを指摘した。主人公の軌跡は、入植者の墓地に見られる自然、混沌、忘却、匿名の世界から、フランスの墓地に象徴される秩序、言語、記憶、歴史の世界へと移行し、父の探索を機に前者に舞い戻ろうとする動きとして捉えられるが、この回帰には、「貧しく、無知で、執拗な生活」に耐えられないがゆえにそのもとを逃れた、彼の母親に対する謝罪を伴う。歴史に身を投じ、「怪物」と化した主人公と、聖性すら帯びる、無垢な母親との対立は、未完に終わったこの小説のための覚書を参照すると、人類の進歩の一つの象徴である飛行機（スプートニク）と、母親と同様に原初の沈黙を宿す海との対立という文明論的な広がりを持ちえたことが窺える。

以上の考察から、1950年代、カミュは、「歴史の中にあっても歴史に対立しながら」（『反抗的人間』最終節）、いわば彼が「我々の再生の詩人」と呼んだ盟友シャルと分かち合うその姿勢を貫くことによって、「追放」から「再生」への転換を図ったと言えるだろう。カミュは自然の美と、歴史を耐え忍ぶ人々に共に忠実であろうとして文学創造を行った。最晩年には、愛する家族、祖国を歴史における忘却から救うべく、『最初の人間』を執筆した。彼はこの小説の創造によって、作家としての使命と喜びを新たに見出したのである。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 安藤麻貴 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 和田 章男
	副 査 大阪大学 教授 山上 浩嗣
	副 査 大阪大学 教授 岩根 久
	副 査 放送大学 特任教授 三野 博司
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

時代の追憶における植物名の重要性を指摘するとともに、その生成過程に祖国アルジェリアの再生への希望を読みとる。

「水と再生」を主題とする第Ⅲ部では、水の表象の分析を通して、追放から再生への軌跡を追う。第1章では、北の冷たい運河と南の光り輝く海を対比しつつ、『転落』においては罪の意識が川や運河と関連づけられていると論じる。第2章では『追放と王国』収録の「生い出ずる石」を再び取り上げ、生成過程の中で泉の役割がいっそう象徴的に貧者の連帯を表すようになることを明らかにする。第3章では『最初の人間』を考察対象とし、歴史と自然、記憶と忘却、秩序と混沌というテーマと絡めつつ、歴史に身を投じる主人公と、原初の沈黙を守る母と海との対比のなかに見られる文明論的広がりを探る。

カミュにとって晩年にあたる1950年代に、歴史の中にありながらも、自然の美や沈黙する人々を忘却から救済すべく追放から再生へという方向性のもとに創作を進め、『最初の人間』執筆へと向かったと結論づける。

#### 【論文審査の結果の要旨】

本論文は、1950年代に出版あるいは執筆されたカミュの後期作品に焦点を当て、追放のテーマから再生のテーマへという文学創造の軌跡を明らかにすることを目的としており、各作品を個別に分析・解釈しながらも、それらをつなぐ関連性を重視することによって晩年の創作活動を総合的に理解する試みである。第Ⅰ部は短編集『追放と王国』の各編の分析にあてられ、第Ⅱ部と第Ⅲ部はそれぞれ植物のテーマ、水のテーマのもとに後期作品が考察される。第Ⅰ部と第Ⅱ部・第Ⅲ部ではアプローチの仕方が異なるが、そのためにかえて多角的で豊かな分析・解釈がなされている。手帳、草稿、タイプ原稿、校正刷りなどの一次資料に基づく作品の生成過程の分析は、本論文の実証性と説得性を高めている。特にエクス=アン=プロヴァンスの市立メジャーヌ図書館で実地調査したタイプ原稿のヴァリエーションの調査・分析は、語彙レベルの細部にまで及ぶ綿密かつ正確なものであるとともに、作品の構造や意味への影響、他の作品との関連、作者の思想の深化に関するきわめて説得的な論が展開されている。さらには、プレイヤード叢書に収録されているヴァリエーションの不備や不正確さを正すなど、資料の整理および提示においてもカミュ研究の進展に大きく貢献していると言えよう。

第Ⅱ部で考察の対象としているジェームズ・サーバーの絵本の翻訳、詩人ルネ・シャルとの共作である写真集、ディズニーのドキュメンタリー映画の解説のような、これまで研究者によってほとんど無視されていたカミュの著作物に注目を集めたことは新鮮かつ刺激的である。これらの作品において、植物の生成への関心から再生のテーマが現れ、最後の作品となる『最初の人間』へとつながっていくとする論は秀逸である。写真や映像の分析、旅行記やガイドブックなどの資料に基づく地名の調査、さらにはアルジェリア独立運動・独立戦争のような歴史的現象との関連づけなど、豊富な資料調査に基づいてカミュの後期作品の多様な側面に光を当てることに成功している。説明不足のために、論の展開が明快でない箇所がわずかながら見られるが、一次資料の正確な調査・分析と、注目度の低かった著作の考察を踏まえて、カミュ晩年の創作活動の軌跡を総合的に捉えた意義は大きい。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： カミュ晩年における文学創造の軌跡—追放から再生へ—

学位申請者 安藤 麻貫

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	和田 章男
副査	大阪大学教授	山上 浩嗣
副査	大阪大学教授	岩根 久
副査	放送大学特任教授	三野 博司

【論文内容の要旨】

本論文は、アルジェリア生まれのフランス人作家アルベール・カミュが公私ともに試練の年であった 1950 年代に出版あるいは執筆された『転落』、『追放と王国』、『最初の人間』、ならびに翻訳、写真集、映画の解説等の著作を対象とし、手帳、草稿、タイプ原稿、校正刷りなどの一次資料に基づく生成過程の調査・分析によって、「審判と追放」の系列から「愛」の系列に至る創作の軌跡を明らかにすることを目的としている。A4 判 263 頁、四百字詰原稿用紙に換算して約 769 枚、3 部から構成されている。

第Ⅰ部は短編集『追放と王国』の 6 編の物語を対象として、生成過程の分析を踏まえて「追放」のテーマの多面的な様相を論じる。第 1 章では「不貞の女」を取り上げ、アラブ人との関係の中でヒロインの孤独が強められていく過程を追う。「背教者」を扱う第 2 章では、地名のスペルによってイブン・パトゥータの旅行記に物語の源泉があることを実証し、中世アフリカの奴隷制度と現代の全体主義的政治傾向を関係づける。第 3 章では「口をつぐむ人々」の舞台をなす樽工場を分析しながら、海の喪失と言葉を奪われた労働者の状況に焦点をあてる。第 4 章では「客」を対象として、故郷にいなから「追放」状態へと陥る過程を明らかにする。「ヨナ」を扱う第 5 章では、孤独な芸術家が家族の絆を強める方向に再生への可能性の示唆を見る。第 6 章では他の 5 編の追放のテーマを集約している主人公の中に、『最初の人間』につながる再生への方向性を探る。

第Ⅱ部では、これまで研究者によって注目されることがなかった翻訳、写真集、映画解説における植物の描写に着目し、そこに見られる再生のテーマを考察する。第 1 章ではまずアメリカ人作家ジェームズ・サーバーの絵本『最後の花』のカミュによる翻訳を取り上げ、戦争によって破壊された地上に一組の男女と一輪の花しか残らないという結末と、「アダム」というタイトルが考えられていた『最初の人間』を関連づける。また、詩人ルネ・シャルとの共作写真集『太陽の後裔』における植物表象を分析し、樹木の写真から「最初の人間」および「最初の庭」という表現が導き出されたことを明らかにする。さらに、ディズニーのドキュメンタリー映画『砂漠は生きている』の解説本に収録されたエッセー「雨と開花」において、植物の命のつかの間の輝きとはかなさに関心を寄せるカミュの姿を追うとともに、同時期にエッセー集『夏』に再録された「アーモンドの木」においてもまた植物の生成がテーマとなっていることと関連づける。第 2 章では、『最初の人間』の草稿調査に基づき、喚起される少年